

全道の避難先やご支援をいただいた 皆さまの思いを糧に

社会福祉法人北海道厚真福祉会
障害者支援施設厚真リハビリセンター 支援係長
特別養護老人ホーム豊厚園 主任介護士

武田裕人さん
久保朋子さん

——法人の概要を教えてください。

武田 北海道厚真福祉会は、昭和52（1977）年に設立認可を受け、翌年1月に「障害者支援施設厚真リハビリセンター」、昭和63年11月に「特別養護老人ホーム豊厚園」を開業しました。現在はその二つの事業所に加えて「あつまデイサービスセンター」「厚南デイサービスセンター」「あつま居宅介護支援事業所」を運営しています。



武田 裕人さん

——お二人はどこで地震を迎えましたか？

久保 私は特別養護老人ホーム豊厚園の主任介護士として入居者の介護や介護職



久保 朋子さん

でしたが、もし火災が発生していたらと思うと、今でもぞっとしますね。

——その後、どちらに避難したのですか？

武田 厚真リハビリセンターの避難場所として本郷マナビイハウス（公民館）を確保しました。前日、そこで利用者の葬儀を行っており、鍵を借りていたのでスムーズに避難することができました。

久保 豊厚園の利用者は厚真町スポーツセンターに移動しました。寝たきりなど重度の利用者は、近隣にある他法人のデイサービスセンターに避難させていただきました。

スポーツセンターの体育館では、避難している一般の町民から少し離れた場所を豊厚園の専用スペースとして確保していただきました。プライバシーが保てるようカーテンで仕切りオムツの脱着を行いました。が、やはり施設とは勝手が違います。状況が理解できず、混乱されている利用者があり、周りの町民に不安を与えないようパーティションを設けました。私たち職員も、この先いつたいたいなるんだろうという大きな不安を抱えていましたが、利用者には不安な顔を見せられないので、「どんなこ

員のマネジメントを担当しています。震災直後は町内の自宅にいて、目が覚めるのと同時に揺れが始まりました。

武田 私は厚真リハビリセンターで相談員兼支援係長として勤務しています。震災当日は夜勤で仮眠を取っていました。この日、厚真リハビリセンター、豊厚園には夜勤者がそれぞれ3名、宿直1名の合計7名が勤務していました。

ものすごい揺れで目を覚まし、被害状況を確認しようとしたのですが、照明が点きません。暗闇に目が慣れても、舞い上がったちりやほこりで視界が遮られました。懐中電灯を使って利用者の安否を確認したところ、誰も負傷しておらず、ひとまず安心しました。ボイラーの配管が破損しており、ガス漏れによる火災の危険があるた

とがあっても、この困難から逃げずに乗り切らなくてはならない」という思いで日々を過ごしていました。

——町内の避難所にどれくらい滞在したのですか？

武田 老人福祉施設協議会や、北海道社会福祉協議会などを通してたくさん施設の受け入れを申し出てくれたため、その日のうちに全道約10カ所の施設に避難を開始しました。高速道路が使用できないので、一番遠い新得町へも一般道での移動でした。

め、すぐに利用者の避難を開始しました。

——どうやって利用者全員を避難させたのですか？

武田 両施設合わせて111人（豊厚園のショートステイ3人を含む）の利用者がいるうえで自分で歩ける人が少なく、避難は容易ではありませんでしたが、その時は「何とかしなくては」という使命感に駆られ、無我夢中でした。豊厚園は1階、厚真リハビリセンターは2階に入居棟があるため、「避難用すべり台を使う」「背負う」「抱きかかえる」「ベッドごと移動させる」など、利用者さんの状況に応じて避難させました。

午前4時30分頃に全員の避難が完了しました。少ない職員で避難させるのは大変でしたが、災害を想定していくつかの法人と防災協定を結んでいましたが、このような形で現実になるとは思っていませんでした。

——分散避難の苦勞をお聞かせください。

武田 避難先となる施設すべてに職員を配置しましたが、家庭の事情などで家を空けることができない職員もいたため、初動の人員確保が困難でした。シフトを組んで職員を固定配置できるようにするまでは、とりあえず可能な限りの人数を送り出し、避難先の職員さんと相談しながら何を行えば



豊厚園／厚真リハビリセンターの敷地内の地割れ
〔北海道厚真福祉会提供〕



発災後の豊厚園の介護職員室〔北海道厚真福祉会提供〕



厚真リハビリセンター入居者の避難所、事務所として利用していた本郷マナビハウス

よいかを考え
るなど、手探
りの状態でし
た。

施設内に職
員が泊まれる
スペースがあ
る場合は交代
で滞在しまし
たが、宿泊で
きない北広島

市や岩見沢市などの施設には通いました。
かなりの負担だったと思いますが、避難期
間は仮設住宅が完成する平成31（2019）
年1月21日を目標としていたので、それま
で頑張ってもらうほかありませんでした。

避難先の嘱託医や看護師さんに利用者の
健康管理をお願いしましたが、パソコンが
壊れて情報を引き出すことができないのが
難点でした。カルテに記載されていない既
往歴などを記憶から書き起こしたり、支援
員が避難施設の看護師さんと薬の内容を相
談したりするなど、ふだん行わない業務が
必要になりました。

避難先も停電による非常事態にあったの

設に慣れるまで時間がかかりそうです。本
来であればこの2年間でたくさん思い出
をつくることができたのに、避難生活でそ
れができませんでした。コロナ禍でやれる
ことが限られています。失った時間を取り
戻すことができるような、楽しいことを
計画したいと思っています。

——長かった避難生活で思い出に残ってい
ることはありますか？

武田 全道が停電し、誰もが大変な状況を
過ごしている中、多くの施設の方々が私たち
を温かく迎え入れてくれたことを感謝してい
ます。震災直後に利用者さんの家族、私た
ち職員の家族、OBやOGが駆けつけて食
料や物資を持ち寄ってくれたことも嬉しかっ
たです。直接的な支援以外にも物資や義援
金など、たくさんの方々が手を差し伸べてく
れたことが前に進む原動力になりました。

久保 避難させていただいた施設の職員さ
んが「疲れたでしょう」と声をかけてく
れ、温かい食べ物を提供してくださったこ
と。夜勤をしている時も「私たちが見守っ
ているから、少し休んでいて」と気遣って
くれたこと。着の身着のままの姿で避難し

ですが、感謝しきれないほど温かく迎えて
くれました。少ない人員でケアしている私
たちに配慮してくださり、利用者の入浴介
助を行ってくれるなど、人的支援、物資支
援、環境支援、メンタル支援などにご尽力
をいただきました。

——震災の翌月に応急福祉仮設住宅の建設
が決定しましたね。

久保 利用者さんも厚真町へ帰りがたがって
いましたし、避難先まで通勤する職員の負
担も大きかったので、みんなが生活できる
応急福祉仮設住宅の話は朗報でした。多く
の職員は先行きが見えない状況に不安に
なっていたので、再建を目標に頑張ること
ができました。

武田 施設利用者がまとめて入ることがで
きる仮設住宅は過去に例がないそうです。
一般的な仮設住宅は横並びに棟が建設され
ますが、この福祉仮設住宅はホールや事務
室、食堂、浴室などがある「共有棟」と
「住居棟」が渡り廊下で結ばれており、介
護や支援を行うための動線が確保されてい
ます。バリアフリー構造で埋め込み式の浴
室や特殊浴槽も設置されており、使い勝手

た私たちにお風呂をすすめてくれたり、ド
ラッグストアで下着を買ってくれたりした
こと。避難先の施設で受けた一つひとつの
親切が心に刻まれて、鮮明な記憶として
残っています。

——震災の体験から得た教訓があれば教え
てください。

久保 火災などの避難訓練は実施していま
したが、大地震のような災害が発生する

はこれまでの施設と遜色ありません。

——応急福祉仮設住宅は災害救助法上、新
規利用者の受け入れができないそうで
すね。

武田 それが一番大きな問題です。震災当
時は豊厚園60人、厚真リハビリセンター48
人が入所していましたが、今は豊厚園48
人、厚真リハビリセンター39人に減少して
います。デイサービス事業も従来通りの営
業が難しく、週3日・1日7名の利用に縮
小しました。減収は法人の運営を圧迫しま
すし、「利用したい人が利用できない」と
いうセーフティネットが満たされない問題
も発生しています。

様々な問題が山積していますが、「この
逆境を乗り切ろう」というムードになり、
経営状況や避難を理由に離職する者はいま
ませんでした。むしろ震災前よりも結束力が
強くなったように感じます。

——新しい施設の入居に向けてどのような
お気持ちですか？

武田 令和2（2020）年12月20日から
順次入居しますが、利用者さんが新しい施

と、自分たちだけでは乗り越えられないこ
とがたくさん出てきます。停電が起こるな
んていうことは想定していませんでしたの
で、「懐中電灯を多く用意すればよかった」
など、あとから反省することもたくさんあ
りました。

震災では災害に備えた「準備」「協力」
「連携」「支え合い」が大切です。日頃から
備品の用意はもちろん、協力し合える体制
や連携づくりが不可欠だと思います。



応急福祉仮設住宅



令和2年12月にオープンした新施設